

抄録集より転載

## 演題27 食道異物摘出操作後に生じた咽後膿瘍 の一治験例

内藤雅夫他(名保大)

症例は2才男子，基石を誤嚥某外科病院にて透視下に腸鉗子を用いて異物の摘出が試みられるも成功せず当科を紹介された。異物は翌日胃内へ自然落下したが数日後に下咽頭炎，食道周囲炎さらに咽後膿瘍を来たしたが膿瘍の切開排膿および強力な化学療法にて救命し得た症例を経験したので治療経過，ならびに治療の問題点を検討し報告した。

## 特 別 講 演

### 術後感染症に対する予防的化学療法の現況の問題点

石引久弥(慶応大外科)

手術後合併症としての感染症に対する対策は手術成績向上，手術適応拡大に貢献する大きな因子であることは歴史の示すところである。抗菌化学療法剤の導入はこの分野における明らかな進歩であったが，術後感染症に対する予防的化学療法の適正な臨床評価，理論的指針の設定には議論が多いところである。

術後感染症は手術侵襲を受けた生体に発生することが感染症の発症，臨床対策上の特異点であると要約できよう。従って，その検討にあたっては，生体・微生物・化学療法の3者をこの特異性の下で，解析しなければならない。

予防的化学療法の薬剤選択・投与の基本的条件として，1.原因菌となりうる汚染菌が感受性を示す薬剤，2.汚染菌の発育阻止可能な濃度で，目的部位に移行しうる薬剤，投与方法，3.副作用は投与効果を上回わず，副作用対策のある薬剤，投与方法，4.術後感染症が発症しても，他治療薬剤の存在すること，などをあげることができる。

以上の内容を中心に術後感染症に対する予防的化学療法の現況から，更に問題点について述べた。